

論文

想像力と火山

——サドのリベルタンたちはなぜ閉じこもるのか——（その2）

田川 光 照

要 旨

[本号掲載分] サドのリベルタンの多くは、開かれた世界で悪事を重ねた後閉鎖的な空間に閉じこもる。それは、世界を構成する個々の対象を非在化することによって、逆に世界全体を想像世界に取り込むためである。『悪徳の栄え』の中で主人公によって披露される快楽を創出する秘訣は、作者サドが身を置いた監獄における著述と重なり合う。サドにおいて放蕩行為としてのエクリチュールとでも言うべきものが成立しているのである。

ところで、リベルタンたちは社会の規範と相容れない自分たちの行状を正当化しようとする。その正当化は、主として相対性の視点および自然の視点から試みられる。いずれの視点からの正当化も、悪の観念を不透明なものにするが、とりわけ再生産運動体という自然観に依拠した正当化は破壊（殺人）の不可能性をリベルタンたちに突きつけることになり、リベルタンたちは苦しむことになるのである。

キーワード： 想像力（imagination）、閉じこもりの空間、監獄、孤独、イゾリズム（isolisme）、火山、放蕩の主体、放蕩行為としてのエクリチュール、自然

目 次

はじめに

1. 閉じこもりの空間
2. イゾリズム (isolisme)
3. 想像力 (imagination) = 放蕩の主体 (以上, 第4号)
4. 放蕩の対象としての悪
5. リベルタンたちの自己正当化と苦悩 (以上, 本号)
6. 始原の自然 (以下, 次号)
7. 無感動の反復

おわりに

4. 放蕩の対象としての悪

『ソドム 120 日』において、8 日目にデュルセが次のような発言をしている。

幸福が存在するのは快樂のうちにはなく、欲望のうちになのであり、この欲望に対置される拘束を打ち破ることにあるのだ。〈中略〉 誓って言うが、ここに来て以来、おれの精液がここにいる者たちに対して流されたためしは、一度としてない。ここにいない者たちに対してしか注がれたことはないのだ。さらに、おれの考えでは、不幸な者の有様を見ることによって生まれる快樂たる、比較が欠けている。人間がみな同じで、それらの差異が存在しないところには、それがどこであれ、幸福は決して存在しないだろう。²³⁾

このデュルセの言葉は嘆きにも聞こえる。そもそも、4 人のリベルタンたちはいっそうの快樂を求めて、慰み者たちを引き連れ自ら人里離れた孤城に閉じこもったのであった。「拘束を打ち破る」必要のない立場に、自ら身を置いたのではなかったのか。それに、「人間がみな同じで、それらの差異が存在しない」とはいったいどういうことか。慰み者たちは不幸な者であり、彼らリベルタンとの間には画然とした差異があるのではないのか。

上のデュルセの言葉にたいして、ブランジ公爵が次のように言う。

このおれは、盗みに、謀殺に、放火に勃起したものだ。おれははっきりと確信しているのだが、おれたちを掻き立てるのは放蕩の対象ではなく、悪の観念なのだ。したがって、勃起するのは唯一悪のためであり、対象のためではないのだ。だから、その対象からおれたちに悪を犯させる可能性が奪い取られれば、おれたちが対象のために勃起することはなくなるだろう。²⁴⁾

前節で見たように、リベルタンたちが繰り広げる放蕩の主体はリベルタンたち自身とい

想像力と火山

うよりも彼らの想像力であり、語り女の物語によって掻き立てられた想像力が新たに生み出す放蕩を実現する道具が慰み者たちなのである。リベルタンたちにとって慰み者の存在は二義的なものに過ぎず、一義的なものは「悪の観念」であるということになる。しかし、「悪の観念」はシリング城に内在するものではない。それは、リベルタンたちがこれまで身を置いてきた外の世界、すなわち「善の観念」が対比的に存する世界に属する。孤城に閉じこもっていながら、彼らの想像力のベクトルは外の世界に向けられているのである。このことは、逆に言えば、外の世界がシリング城に忍び込んでいることを意味するであろう。その媒介が語り女の物語である。語り女の物語を媒介に、想像のうちにおいて拘束を打ち破り、「ここにいない者たち」に対して精液をほとばしらせる。つまり、リベルタンたちは快樂そのものにおいて外の世界と繋がっているのである。

ここで、『ソドム120日』を含め、サドのリベルタンたちが孤絶した空間に閉じこもるのは、ほとんど常に、開かれた世界の中で悪行をほしいままにした後である、ということに注目する必要がある。

たとえば、『悪徳の栄え』の一登場人物ミンスキーは、アペニン山中に閉じこもった理由を、「おれは旅した。世界全体も、おれの欲望の大きさにとって十分広いようには思えなかった。世界はおれに限界をつきつけるのだった」²⁵⁾と言い、「おれは、身を落ち着けるつもりでイタリアにやって来た。しかし、おれの想像力のあらゆる陰険な錯乱にふけることのできる、風変わりな、神秘的で、荒涼とした場所が欲しかった」²⁶⁾と言う。ミンスキーもまた、『ソドム120日』の4人のリベルタンと同様、「想像力の気まぐれ」にいわば奉仕するために閉じこもったのである。

リベルタンたちが、開かれた世界の中でいかに悪事をなし、いかに放蕩にふけようと、それで十分であるということは決してない。それは、世界が彼らに次々と対象を差し出し、対象が彼らの行為を限定するからである。つまり、彼らは個々の対象との関係の中にそのつど封じ込められてしまうのである。彼らが全世界に害悪をふりまくとしても、それはそのつど立ち現れる対象との関係の中での悪事、すなわち部分的悪事の総和でしかない。

それゆえ、彼らは旅をしなければならないのであるが、旅をし、悪事を重ねれば重ねるほど、彼らの想像力にとって部分的悪事は耐え難いものとなるであろう。しかし、それでも世界は対象を提供し続ける。とすれば、彼らに悪をなさしめているのは、本当に彼らの想像力なのか。もしかすると、対象の方が彼らに悪をなさしめているのではないのか。上に引用したブランジ公爵の発言の中にある「対象からおれたちに悪を犯さしめる可能性が奪い取られれば、おれたちが対象のために勃起することはなくなるだろう」という言葉は、この間の事情を暗示しているとみなすことができる。

リベルタンたちは、閉じこもることによってその呪縛から逃れる。つまり、世界を構成する個々の対象から身を引き離し、その対象を非在化し言葉に還元することによって想像世界の中に取り込み、「悪の観念」による「勃起」を保証するのである。その際、彼らの悪事の対象は何よりも人間であるがゆえに、その空間の中では、リベルタン以外の人間は徹底して非人間化されなければならない。『ソドム120日』の慰み者たちは、鞭や排泄物と同列の放蕩の単なる道具に還元され、語り女たちは言葉に還元される。最終的には、リベルタン自身の肉体が他者として、すなわち非在化されるべき対象として立ち現れ、その時彼らは自己の死を甘受しなければならないであろう。『新ジュスチヌ』に登場するリベルタンのひとりロランは、自分の命をジュスチヌの手にゆだねる。

おれが裸になって、腰掛けにのったら、お前はおれの首にロープを巻き付けろ。おれがつかの間男根を手慰みして勃起したらすぐ、お前は腰掛けをはずすのだ。おれは首つりの状態になる。苦痛の兆候が現れるか、どっと射精するかするまでは、おれをそのまましておくのだ。苦痛の兆候が現れた場合には、すぐにロープを切れ。そうでない場合には、自然の成り行きに任せ、射精が終わってからロープを解くのだ。いいか、ジュスチヌ、おれは自分の命をお前の手にゆだねるのだよ。²⁷⁾

結局、ロランは射精後にジュスチヌによって命を救われることになるのではあるが、こうして、いっさいの対象がリベルタンたちの想像力の対象となり、彼らの悪事は限定された部分的なもの、あるいはその集合から、普遍的な様相をもつものへと飛躍する。そして、彼らは「悪の観念」によって「勃起」することになる。

対象の非在化による想像世界への取り込みが閉じこもることの意味であるとする、『悪徳の栄え』の中で主人公ジュリエットが語る快樂を創出する秘訣が参照事項として浮かび上がる。少し長いがその箇所を引用する。

まる二週間、放蕩に手を出さず、他のことで気晴らしをし、楽しみなさい。でも二週間経つまでは、リベルタンの考えに近づくことさえいけません。その時期が来たら、ひとりで、落ち着いて、静かに、そしてできるだけ深い暗闇の中に寝なさい。そうしてその期間の間遠ざけていたすべてのことを思い出し、ゆったりと無頓着に、軽い手慰みにふけりなさい。＜中略＞次に、さまざまな種類の錯乱を次第にあなたに提供する自由をあなたの想像力に与えなさい。それらの錯乱のすべてをつぶさに遍歴し、それらを次々に吟味しなさい。地球全体があなたのものであると信じなさい。＜中略＞何も恐れることはありません。あなたを楽しませてくれるものを選びなさい。でも例外をもうけてはならず、何もはぶいてはなりません。＜中略＞試みのすべての負担をあなたの想像力にまかせなさい。とりわけ、あなたの動きを急がせてはなりません。あなたの手は氣質の命令ではなく、頭の命令に従わせなさい。気づかないうちに、あなたが自分の前

想像力と火山

に展開させた様々な情景の一つが、他のものよりも強く、それから遠ざかることも、それを置き換えることもできないほどの力で、あなたを固着させに来るでしょう。〈中略〉あなたはメッサリーナのように気をやるでしょう。それがなされたらすぐローソクに火をつけ、あなたを燃え立たせたばかりの錯乱の種類を、その細部を加重したかもしれない状況を何も忘れずに、覚書帳に書き写しなさい。そうしたら眠り、翌日あなたのノートを読み返しなさい。作業を再びはじめ、あなたにすでに気をやませた考えに少々ずさんでしまった想像力があなたに示唆する、興奮を増加させることのできるすべてのものを加えなさい。さて、その考えの全体を構成し、清書しながら、あなたの頭が助言するすべてのエピソードをさらに付け加えなさい。次に実行しなさい。²⁸⁾

このジュリエットの秘訣を、ロラン・バルトは七段階に分けているが²⁹⁾、その段階区分に従いながら、「想像力」をキーワードにして整理してみよう。

(1) まず二週間の禁欲が行われる。これは想像力を感覚の規制から開放し、想像力に自己展開させるための準備期間である。

(2) 次に、孤立した状態に身を置き、軽い手慰みにふける。この手慰みは、火山たる想像力に火をつけるものであると同時に、手は頭の命令に従わせよと断っているように、想像力のいわばバロメーターになるものである。

(3) いよいよ火のついた想像力に自己展開させる。この時、地球全体が想像力の対象となる。

(4) 情景の一つがもっとも強烈なものとなり、性的快楽を引き起こす。

(5) そうしたら、その情景を委細漏らさずノートする。

(6) いったん眠った後、書き留められた情景を再び想像力の対象とし、興奮を与えるものを付加する。

(7) こうして、一つの書かれた総体が形成され、あとは実行するだけである。

ジュリエットは孤独と静寂の中に身を置くことによって、想像力に「さまざまな種類を提供する自由」を与え、「地球全体があなたのものである」と信じよ、と述べている。日常世界から身を引き離し、その世界を構成する対象を非在化することによって、逆に世界全体を想像世界に取り込んでいるのである。

ところで、このジュリエットの秘訣に創作法が暗示されていることは、ロラン・バルトの指摘を待つまでもなく明らかである。その秘訣において暗示されている孤立すること、準備すること、想像すること、選択すること、書くこと、休止すること、訂正することという創作のテクニック³⁰⁾のうちでも、特に注目すべきは、その訂正が削除ではなく増殖させることであるという点にある。想像力によって展開された情景を書き留め、さらにそれを想像力の対象とすることによって拡充するという方法は、まさにサド自身の創作法にほかならない。『美徳の不運』から『ジュスチヌ』へ、さらに『新ジュスチヌ』へというジュ

スチーナを主人公とする三作品がその典型である。また、中編小説集『恋の罪』の冒頭に付された「小説論」において、サドは次のように作家に忠告しているところである。

いったん草稿が書きつけられたなら、熱心にそれを拡げるように努めるがよい。しかし、その素描がただちに君に規定するように思える限界内に収縮してはならない。その方法をもってするなら、潤いなく冷淡になってしまうかもしれない。われわれが君に望むのは飛躍であって、規則ではないのだ。プランを超え、変化を与え、増殖させたまえ。思いつくのは仕事をしながらでしかないのだ。³¹⁾

また、サドにとって小説とはあくまで想像力による創作であったことは、「人間の生活におけるこの上もなく特異な出来事について語られた寓話的な作品が小説と呼ばれる」³²⁾という「小説論」の冒頭の言葉、および、「もし君がRのように、『誰もが知っていることしか』書かないのであれば、たとえ彼のように毎月4巻の書物をわれわれに提供してくれようとも、筆を取るとにはおよばない」³³⁾という、レアリズムの先駆的作家とみなされるレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ (Rétif de la Bretonne) 批判に端的に現れている。

ここにおいて、リベルタンたちの閉じこもりの空間とサドの実生活における幽閉生活とが重なり合う。「1. 閉じこもりの空間」の中で概観したように、サドは74年の人生において、放蕩の廉で、反革命容疑者として、さらに猥褻で危険な作品の作者として、絶対王政下、革命下、そしてナポレオン体制下というサドが生きたすべての体制下で、通算30年近くの幽閉生活を送った。その中でもとくに重要なのは、1778年から1790年までの、ヴァンセンヌ、バスチーユ、シャラントン精神病院と続く、約11年7ヶ月にわたる幽閉生活である。それ以前にもサドは作品を書いているとはいえ、この期間にサド的と言いうる作品の執筆がはじまるのである。具体的には、『ソドム120日』、ジュスチーナを主人公とする3作品のうち最初のものである『美德の不運』、それに『アリーヌとヴァルクール』の少なくとも一部分などが書かれている。

リベルタンたちが自ら閉じこもることとは裏腹に、サドは閉じこもり＝イゾリズムを強いられたことになるのであるが、その閉じこもりの空間における書く行為とは、まさにジュリエットの秘訣そのものであると言えるであろう。イゾリズムを強いられることによって、つまり、放蕩の対象が非在化されることによって、「地球全体」がサドの想像力の対象となったのであり、放蕩者サドにおいて放蕩とエクリチュールとが一致することになった。いわば放蕩行為としてのエクリチュールの誕生である。

ところで、サドがイゾリズムを強いられるということは、社会から排除されることをも意味し、社会全体が彼にとって敵となったことを意味する。1783年にヴァンセンヌで書いた

想像力と火山

た夫人宛の手紙の中で、「私を不幸にしたのは私の考え方ではなく、他の人間の考え方なのだ」³⁴⁾と書いている。この自己正当化が、サド的作品の出発点となったとみてよいであろう。しかし、サドは、単に自己正当化にとどまることはなかったのである。

『ジュスチヌ』および『新ジュスチヌ』の中に次のような一節が見られる。僧院サント・マリー・デ・ボワの破戒僧のひとりクレマンが、自分が眠っている間も慰み者を枕元に立たせ、一晩中苦しめていることを知ったジュスチヌは、「そのならず者は、眠っている間にさえ自分のそばにいる者を苦しめておきたいなんて」と叫ぶ。それに対して、慰み者のひとりであるアルマンド（『新ジュスチヌ』ではリュサンド）が次のように説明するのである。

その点では、あの変態作家たちと同じなのよ。彼らの墮落加減ときたら、死後にまで自分たちのすべての犯罪を広げるといふ目的のためにのみ、恐ろしい理論体系を出版するほど危険かつ旺盛なの。自分ではもう犯罪を犯せなくても、書物がそれをしてくれる。墓場までこの考えを持っていくことで、彼らは、死ゆえに悪を放棄せざるをえない無念を慰めるのよ。³⁵⁾

また、『悪徳の栄え』の中で、サドはクレルウィルとジュリエットに次のようなやりとりをさせている。

「あたし [=クレルウィル] が眠っている時ですら、何らかの混乱の原因でない時は一瞬もなく、この混乱が全人類の墮落と歴然たる錯乱を引き起こすまでにひろがり、あたしが死んで活動しなくなった後も、ずっとその効力が消えずに残っているような、そんなおそろしい、永遠の効力をおよぼす罪悪を発見したいと思っているのよ」

「そんな途方もない願いをかなえてくれるのは」とあたし [=ジュリエット] は答えました、「教唆扇動だとか、著述とか、感化とかいった行為によって達成される、いわゆる精神的殺人以外にはないと思うわ」³⁶⁾

サドは、イゾリズムを強制されることによって自己の正当性を語ることを強いられるが、それを超えて、彼の著述は永遠の犯罪へと向かったのである。「ルソーは普遍の名のもとに正当性をもって語ることができるために孤独の中に自己を置いている」³⁷⁾とジャン・スタロビンスキー (Jean Starobinsky) は書いている。サドのイゾリズムはまさにこの裏返しである。サドは孤立を強られることで、普遍の名のもとに自己の正当性を語ることを強いられ、それが犯罪としての著述へと向かう契機となった。犯罪行為としての著述、これは放蕩行為としてのエクリチュールの到達点である。

サドの作品に最初に犯罪性を見出したのは、サドと同時代の作家レチフ・ド・ラ・ブルト

ンヌであった。代表作『ムッシュー・ニコラ』*Monsieur Nicolas* の中でレチフは次のように書いている。

絶えず己自身に因って人間の「心」を研究し、それを明るみに出さんとしている私は、老人たちの残虐趣味を暴かんものと努めた。そして私は彼らの無能力のなかにそれを見出した。彼らを興奮させるためには、この上もなく猥褻な表現、この上もなく忌まわしい愛撫が必要なのだ。大革命以来書かれている『ジュスチーヌ』『アリーヌ』[＝『アリーヌとヴァルクール』]『閨房』[＝『閨房哲学』]『放蕩の理論』といった呪うべき作品にみられる残虐の源もそこにあることがわかった。本書第8部において私はそれらの作品の著者を暗示しているが、それは素性が知られていることを彼に示すことで、「理論」の出版を思いとどまらせたかったからである。その作品はまだ刊行されていないが、私はその原稿を読んだのだ……。〈中略〉もし万一『放蕩の理論』が出版されることにでもなれば（この不道徳な世紀においてはありそうなことだ）、極悪非道の徒をも身震いさせることであろう。〈中略〉人でなし作家はこの忌まわしい作品の続編を準備しているが、その詳細は省くことにする。といってもすでに書いてしまったのだが。最後に3人の孤児——2人の娘と1人の少年——が登場する。彼らは美しく繊細で育ちもよいのだが、両親がなく、無分別にもくだんの侯爵夫人の保護下に置かれるのである。このような犠牲者が『放蕩の理論』の『続編』において拷問にかけられるに相違ない（『放蕩の理論』が『閨房』の続きであるのと同じく）。おお、政府よ、この悪党の機先を制してくれ。もし兵士たちによって読まれたなら、2万人の女性を残酷な死においやりかねないのだ。³⁸⁾

ここでレチフが言及している『放蕩の理論』*La Théorie du libertinage* とその『続編』*Suite* なる作品をサドが書いたかどうかは疑問ではあるが、³⁹⁾レチフにとってサドは「2万人の女性を残酷な死においやりかねない」「人でなし作家」だったのである。また、サドの作品が犯罪とみなされうことは、1950年代にあったフランスでのサド裁判や、1960年代にあった日本でのサド裁判が証明しているところでもある。

ここで、サドが『アリーヌとヴァルクール』で描いているトマス・モア流のユートピアであるタモエを参照したい。

南太平洋ソシエテ諸島近くにあるというタモエ島の啓蒙君主ザメは、ヨーロッパ旅行の教訓から、人間の不幸の源泉は財産と身分の不平等、および人間が情念と法との板挟みになっていることにあるという結論を導き出す。⁴⁰⁾この結論に基づいて理想郷タモエを作り上げようとしているのである。ザメは、内容は異なるにしても、リバルタンたちと同じように旅行の末タモエに帰ってきたのであるが、それは、ヨーロッパ世界を否定するためであると言えるであろう。彼がタモエで作り出す制度は、ことごとくヨーロッパの制度を否定し、ヨーロッパの人間のあり方を否定するものである。ただし、ザメは君主たる「自分が死んだ時、この幸福な島の住民たちは自由な共和政のもとで幸せを享受することになる

想像力と火山

だろう」⁴¹⁾と、自分の死によってタモエの制度が完成されることを述べている。これはヨーロッパの全的否定と言ってよいが、これを可能にしているのはまさにヨーロッパとの隔絶であろう。

ザメがヨーロッパと隔絶するとは、彼にとってヨーロッパを非在化することを意味する。非在化することによって全否定の対象となる。彼はタモエ島の住民をいわば道具にして、ヨーロッパの否定を実践しているのである。このザメの立場はリベルタンたちの立場と極めて近く、タモエ島とリベルタンたちの閉じこもりの空間は本質的に同じであると言えるであろう。

ここで、次のように言いうる。リベルタンたちが閉じこもることによって世界を構成する対象を非在化し、世界全体を想像世界に取り込むとは、「悪の観念」に全権を付与するためであると同時に世界を全的に否定するためである、と。したがってまた、犯罪としてのエクリチュールが目指すものは世界の全否定である、と言うこともできる。ザメとリベルタンたちの立場の相違は、前者が善すなわち建設に向けての否定であるのに対し、後者が悪すなわち破壊に向けての否定であるという点にある。つまり、両者は背中合わせになっており、タモエをユートピアと呼ぶとすれば、⁴²⁾リベルタンたちの閉じこもる空間、とりわけ『ソドム 120 日』のシリング城は悪のユートピアと呼ぶことができるであろう。

5. リベルタンたちの自己正当化と苦悩

閉じこもりの空間において、リベルタンたちは放蕩行為と議論を果てしなく繰り返す。放蕩行為が議論を生み出し、議論が放蕩行為を生み出す。その議論の矛先は愛と快樂、神、宗教、社会的法など世界を構成するあらゆる問題に及び、悪を正当化する立場から論じられる。それらは、必ずしも一貫性をもっているわけではなく、リベルタンたちは様々な角度から試行錯誤を繰り返すのである。

その議論の出発点は、作者サド自身の場合と同様、社会の規範と相容れない自己の行状の正当化である。その正当化の主要なものは二つの視点からなされている。一つは相対性の視点、もう一つは自然の視点である。

相対性の視点はさらに二つに分類できる。すなわち、地理的相対性と時間的相対性である。地理的相対性とは、ある行為が地方や風土によって善とも悪ともみなされるという共時的にみた相対性であり、時間的相対性とは、時代によって善悪の価値観が異なるという通時的にみた相対性である。ただし、この二つの相対性が明確に区分されているわけではなく、両者が渾然と入り組んでいる。相対性の視点からの正当化の例を、以下に二つだけ挙げることにする。

まず最初は、『新ジュスチヌ』の登場人物ロダンが親による子殺しを正当化するくだりの一部である。

ペルシア人、メディア人、アルメニア人、ギリシア人は、まったく自由に自分の子供を享受していた。立法者たちのモデルであるリュクルゴスの法は、父親たちに子供に対するあらゆる権利を与えていたばかりか、親が養育を望まない子供たちや障害のある子供たちを死刑にさえしていた。未開人のほとんどは、子供が生まれるやただちに殺してしまっている。アジア、アフリカ、アメリカの女たちは、非難を浴びることなく墮胎している。クックは、南方の海のすべての島にこの風習があることを発見した。ロムルスは子殺しを許した。十二表法〔前450年頃のローマ最古の成文法〕も同様に子殺しを認めている。アリストテレスはこのいわゆる罪悪を勧め、ストア派は称賛すべきものとみなしていた。中国ではいまだに子殺しが広く行われており、北京の通りや水路には、親によって殺されたり棄てられたりした子供たちが毎日1万人以上も見出される。そして、この賢明な帝国においては、子供の年齢が何歳であれ、父親が子供を厄介払いしたければ、判官の手に引き渡せばよいだけなのだ。⁴³⁾

次に引用するのは、『悪徳の栄え』のリベルタンのひとりドルヴァルが盗みを正当化するために論じている箇所からのものである。

アビシニアでは、盗みは許されており、盗賊の頭は、頭の職とそれを心安らかに享受する権利とを金で買うほどなのだ。〈中略〉

ミングレル人たちにおいては、盗みは手腕と勇気のしるしで、見事な盗みは公然と自慢される。

現代の旅行者たちは、タヒチ島でもそのしるしが有効であることを発見している。

シチリアでは、強盗は名誉ある職業なのだ。

フランスは、封建時代、盗っ人たちの広大な巣窟にほかならなかった。形が変わっただけで、結果は同じだ。盗むのはもはや封建諸侯ではなく、彼らこそが略奪されるのだ。そして、貴族はその権利を失い、自分を支配する国王たちの奴隷となったのだ。[サドは、この箇所^{かしろ}に次の注を付けている：大革命によって定められた平等は、弱者の強者に対する復讐にほかならない。これは、かつては逆方向のものであった。しかし、この反動は正当であり、順番がなければならない。すべてがまた変わるだろう。自然において不変のものではなく、人間によって導かれる政体は、人間と同様に変動しなければならないからだ。]

有名な盗賊エヴィン・カメロン卿は、長い間クロムウェルに逆らった。

名高いマルク・グレゴールは、盗みを科学にした。自分の配下の者を隣接した各地に送り、小作人によって支払われるべき地代をだまし取り、地主名義の受領証を渡していたのだ。⁴⁴⁾

しかし、この相対性の視点からの正当化は、本質的なものではない。「人間が法と呼ぶものに対する形式的な違反が、偶発的なものであれ、計画的なものであれ、犯罪と呼ばれる」

想像力と火山

が、「法は風習や風土に関係し、200里ごとに変わってしまう」ものであるから、「犯罪」という言葉そのものが「恣意的で無意味な言葉にすぎない」からである。したがって、「ある事柄が本当に犯罪であるかどうかを判断するには、それがどのような損害を自然に与えるかを検討しなければならない。本当に自然の法を陵辱するものしか、理性的に犯罪であると規定できないからだ」ということになる。⁴⁵⁾

そこで、より本質的な正当化は自然の視点からなされる。サドのリベルタンたちは、生来の悪人あるいは放蕩者として設定されており、たとえば『新ジュスチーヌ』中の一挿話「ジェロームの物語」は次のように語りはじめられる。

おれの幼年時代の最初の行状は、人間に精通している者たちに、おれはかつてフランスの地に存在した極悪人の一人になるに違いないと予告した。おれは自然からかくも墮落した性癖を受け取り、このざらざらした自然は、おれのうちで徳徳のあらゆる原則にかくも反したやり方で自己を現したので、おれは人類に共通のこの母を辱めるために生まれた怪物なのか、それともこの母は何らかの動機をもっておれをこのようにつくったのかを、おれは自分自身を見ることによって、是非とも明らかにしなければならなかったのだ。⁴⁶⁾

リベルタンたちは、自己正当化のために自然を盾にとって様々な角度から議論を行うが、大きくは二つの議論からなる。一つは、自然を善と悪との均衡からなると見る自然観である。たとえば、『新ジュスチーヌ』に登場する盗賊クール・ド・フェールは、次のように言う。

自然が内奥の示唆によっておれたちに悪をなさせめるのは、悪が自然にとって必要だからであり、自然がそれを望んでいるからなのだ。自然にはそれが必要なのだ。罪悪の総和も、自然を統制している唯一の法則である均衡の法則にとって不完全で……不十分であるだけに、自然はますます、均衡を完全なものにするために罪悪を必要としているのだ。⁴⁷⁾

二つめは、自然を再生産の運動体とみる自然観である。たとえば、同じく『新ジュスチーヌ』に登場するリベルタンのひとりであるブレサックに、サドは次のように殺人を正当化させている。

破壊する能力は人間に与えられていない。せいぜい形状に変化を与える能力しかもっていないのだ。無に帰する能力をもってはいない。ところで、すべての形状は自然の目には同じなのだ。自然の変動が行われる無辺の坩堝においては、失われるものは何もないのだ。その坩堝に落ち込む物質のあらゆる部分は、別の形相のもとに絶えず姿を現してくる。〈中略〉すべての動物、すべての植物は、同じように成長し、養分を摂取し、自壊し、再生されるのであり、真の死を被

ることはなく、それらを変形するものの中での単なる変化を被るにすぎない。ようするに、すべては、今日ある形状のもとに姿を現しているも、何年か後には別の形状のもとに姿を現すのであり、それらを動かしたいと望む存在の思うがままに、一日のうちに数限りなく何度でも変化しうるのだ。しかも、それによって、自然のいかなる法則も一瞬たりとも害を受けることなしになるのだ。それどころか、この変換操作が生じさせるのは善以外のものではないのだ。というのも、その成分が自然にとって再び必要となる個体を分解することで、不適切にも犯罪と呼ばれるこの行為によって、自然に創造のエネルギーを取り戻させるからだ。愚かな無関心からいかなる混乱をも企てない者は、必然的に自然からそのエネルギーを奪うことになるのだ。⁴⁸⁾

均衡体という自然観からであれ、再生産運動体という自然観からであれ、自然をよりどころにした悪の正当化は、リベルタンたちを苦しめることになる。いずれの自然観からも、確かに、自然にとって悪は必要であるから肯定されるべきものであるという論法が可能ではある。しかし、そうなると、悪そのものの観念があやふやなものとなってしまう。

均衡体という自然観からは、善も自然の均衡に必要であることになるから、「自然の法にとって悪も善とともに役立つよ」⁴⁹⁾という『新ジュスチーナ』の盗賊ラ・デュボワの言葉が示しているように、リベルタンたちが否定しようとする善をも肯定してしまうことになり、善と悪の差異が消滅してしまうのである。さらに、再生産運動体という自然観からの正当化に依拠すれば、自然にとって悪が悪でなくなるどころか、上のブレサックの言葉の中にもあるように「善以外のものではない」ことになってしまう。そればかりか、リベルタンたちが望む破壊（殺人）行為は再生産過程における単なる分解に過ぎなくなってしまうのである。つまり、上の引用の冒頭で言われているように「破壊する能力は人間には与えられてはいない」ことになり、サドは『新ジュスチーナ』のリベルタン・ジェロームに、「おれたちがここでしていることは、おれたちがやりたいことのイメージでしかない。自然を陵辱できないことが、人間の最大の苦痛だ」⁵⁰⁾と言わせるのである。

そこで、リベルタンのある者たちは自然を呪詛しつつ自然を模倣することになる。挿話「ジェロームの物語」において、語り手ジェロームはシチリアのエトナ火山を見学中にアルマニというリベルタンに出会う。アルマニは、自然を研究し、自然の奥義に分け入ろうとする化学者で、ジェロームにある実験を見せる。それは、人工的に火山を噴火させ、メッシーナの町に大災害を与えるものであった。そのアルマニは16歳の時に、「おれは自然を模倣しよう。しかし、自然を憎悪しながらだ。おれは自然をまねよう。自然がそれを望むから。しかし、自然を呪いながらだ」⁵¹⁾と決意したと語るのである。

このジレンマからの脱出の試みとみなすことのできるものが、『悪徳の栄え』の中でピウス6世が語る始原の自然の構想である。

(以下、次号)

想像力と火山

注

- 23) Sade, *Œuvres*, t. 1, pp. 156–157.
- 24) *Ibid.*, p. 158.
- 25) Sade, *Œuvres*, t. 3, p. 701.
- 26) *Ibid.*, p. 703.
- 27) Sade, *Œuvres*, t. 2, p. 1031.
- 28) Sade, *Œuvres*, t. 3, pp. 752–453.
- 29) Roland Barthes, *Sade, Fourier, Loyola*, Ed. du Seuil, 1971, pp. 166–167.
- 30) *Ibid.*, p. 167.
- 31) *Œuvres complètes du Marquis de Sade*, Cercle du livre précieux, 1967–1968, t. 10, pp. 17–18.
- 32) *Ibid.*, p. 3.
- 33) *Ibid.*, p. 17.
- 34) *Œuvres complètes du Marquis de Sade*, t. 12, pp. 409–410.
- 35) Sade, *Œuvres*, t. 2, p. 272.
- 36) Sade, *Œuvres*, t. 3, p. 650. (澁澤龍彦訳『悪徳の栄え』角川文庫, p. 255.)
- 37) Jean Starobinski, *J.-J. Rousseau, la transparence et l'obstacle*, Gallimard, 1971, p. 57.
- 38) Rétif de la Bretonne, *Monsieur Nicolas*, 6 vol, Jean-Jacques Pauvert, 1959, t. IV, pp. 269–271.
- 39) このことについては、拙論「サドとレチフの対立 ——『ジュスチーナ』と『アンチ=ジュスチーナ』—— (その1)」(愛知大学文学会『文学論叢』第80輯, 昭和50年)の注13を参照されたい。
- 40) Sade, *Œuvres*, t. 1, p. 627.
- 41) *Ibid.*, p. 701.
- 42) タモエと同じく『アリーヌとヴァルクール』の挿話中に描かれているピュチュア王国を「悪のユートピア」と見る向きもあるが、私はヨーロッパのカリカチュアと見る。このことについては、いずれ稿を改めて述べたいと思う。
- 43) Sade, *Œuvres*, t. 2, pp. 557–558.
- 44) Sade, *Œuvres*, t. 3, pp. 286–287.
- 45) 『悪徳の栄え』におけるノワルスイユの言葉。 *Ibid.*, p. 330.
- 46) Sade, *Œuvres*, t. 2, p. 703.
- 47) *Ibid.*, p. 452.
- 48) *Ibid.*, p. 501.
- 49) *Ibid.*, p. 434.
- 50) *Ibid.*, p. 625.
- 51) *Ibid.*, p. 779.